

歴史的業績を残した人物に関する発達障害 についての研究

綾 田 す み れ

要 約

近年、発達障害は増加していると言われており、文部科学省の調査によれば通常の学級内に約6.5%程度は発達障害の可能性のあるような児童・生徒がいるという。本研究では歴史的業績を残した偉人や天才の中には発達障害を持っていた人物がいなかったのかを、高校の各科目ごとに歴史的に著名な人物を89名選定し、高校の教科書を用いて調査を行いその突出した部分や個性的な部分などプラス面に焦点を当てて見ていくことを目的とした。その結果、全科目の人物の中で発達障害と鑑別をした人物の割合は、89人中6人で6.7%という結果となった。発達障害の割合に関しては、6.7%と天才や偉人でも一般の人々と変わらない割合で発達障害だと思われるような人物がいるという結果となった。発達障害の人物は理系と、個性をそのまま突出させられるような美術に多く、言語的な能力が主となる倫理や国語といった科目には現れにくいのではないだろうかということが考えられる。

キーワード：発達障害

はじめに

近年発達障害は増加していると言われており。例えば、文部科学省が平成24年に全国の

公立小中学校を対象に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」では、約6.5%程度（40人の学級で2～3人の割合）で通常の学級内に発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒がいる可能性が示されている。

発達障害の可能性のあるような「少し変わった人」というのは特別な存在ではなく、日常生活の中で誰の周りにもいるような存在であり、また、発達障害というものが一般的に表面化されてきた・身近なものになったのではないかと考えられる。

そして発達障害が表面化されてきたことに伴い、そのマイナスの面だけではなく、“発達障害であること”によるその独特な特性や個性などプラスの面にも目が向けられるようになってきた。その例として「発達障害＝脳の個性」と考える新たな教育法で、その子の個性としてある才能を伸ばそうとする教育や、障害ならではの特性を生かしたアウトサイダー・アートなどが挙げられる。過去には病跡学研究として様々な分野で優れた業績を残した偉人などの研究がなされてきた。こうした研究は、現在ではその対象となる人物の範囲も広がり、小説家・画家・音楽家・科学者などさまざまな分野の人物の研究がなされるようになってきている。過去の偉人や天才といわれるような人物たちの中には、その分野において明らかに他の追随を許さないような傑出した才能を持っていた人物も少

*臨床心理学研究科 博士課程（前期）

なくないと思われる。しかしその傑出していた才能が発達障害によるものであった可能性はないだろうか。

そこで本研究では、近年身近になってきたと思われる発達障害・発達障害傾向を過去の歴史的業績を残したといわれるような人物が持っていた可能性はないのかを研究する。

I. 問題と目的

近年になって発達障害が一般的に取り上げられるようになってきたことや発達障害が増加しているといわれていることは前述した。しかし発達障害は近年になって現れ始めたり増加したりしたものなのだろうか。それは近年になって注目されるようになっただけであり、発達障害の人物はその診断基準が確立される以前から居たはずではないだろうか。例えば石坂（2014）は『自閉症とサヴァンな人たち』の中で、江戸時代の自閉症や注意欠陥多動性障害の人物について触れている。そこで石坂は「江戸時代には、精神遅滞や自閉症の人は「障害者」として認知されていたのではなく、社会の一員として生活していたことが窺われる。しかし、彼らが、何らかの違和を醸し出していたであろうことは、予想できる。」と述べている。つまり1952年に初めてのDSMができる以前は、障害者というカテゴライズをされることなく、一般の人々の中に「違和を醸し出す人」というのが混ざって生活を営んでいたということである。こうした一部の人をある時には天才と呼び、今までその天才を対象として取り上げた数々の病跡学研究がなされてきた。

このようなことから、歴史上の人物で何かしらの分野において傑出した才能や特性・個性を持っていた人物が発達障害であった可能性はないのだろうかという疑問がまず浮かぶ。

1. 病跡学（パトグラフィー）とは

病跡学を心理学辞典（1999）で引くと、「主として精神的に傑出した人物（いわゆる天才）

の生涯や精神生活、性格、創造性、病気などについて、精神医学的、臨床心理学的な観点から事例的に研究する学問。精神病理学的に興味ある精神生活の側面と、人間の創造性にとってのその意味とを明らかにすることを目的としている。」と記述されている。

また、加藤正明（1993）の新版精神医学事典によると、パトグラフィーは「傑出した人物における精神生活と創造活動の関連を精神医学ないし精神病理学の立場から解明しようとする複合領域」とされている。

さらに日本大百科全書（1988）によると、ヤスパース（Jaspers, Karl）は「パトグラフィとは、生活誌あるいは伝記で、その目的とするところは、第一に、精神病理学者に興味ある精神生活の側面を記述し、その発生を論じることであり、第二にこのような人間の創造力の発生を精神病理学的な精神生活がどのような意味をもつものであるか明らかにすることである」と定義し、「精神病理学的に興味のある精神生活の側面を述べ、そういう人間の創造の原因に対してこの精神生活の諸現象・諸過程がどんな意義を持つかを明らかにしようとする生活記録」とも述べた。また、グルーレ（Gruhle, Hans Walter）は「パトグラフィとは、傑出人の異常な性格特徴、または精神的側面を知るための、特異な形式の伝記Biographieである」、「ある傑出した人の異常な本質特徴とその発展を、生活と作品を基にして提出しようとする伝記の一形式」と定義していると記載されている。

2. 発達障害について

A. 発達障害概念の歴史

発達障害概念の歴史に関して「発達障害の基礎」（1999）によると以下のように説明されている。

それによるとまず、日本語で使用される発達障害にも Developmental Disorders と Developmental Disabilities という2つがあるという。

これら2つはともに発達障害と訳されるが、前者は医療を中心に置いた考えとして、国際疾

病分類 (ICD) やアメリカ精神医学会による疾病分類 (DSM) などで使われている。一方後者は、福祉や行政、リハビリテーション医療を中心に使用されている。そしてこの Developmental Disorders という語は、ジョン・F・ケネディ大統領が1961年に精神遅滞の予防、治療、対策を国のレベルにおいて考えるために28人の専門家を集めて委員会を作ったことに遡るとされる。この法律がアメリカで一般に広く認知され、WHOの国際障害分類のきっかけとなった。その後1963年、精神遅滞と精神疾患に関する疾患群への国家施策上での重要性を米国議会に訴え、初めて mental disability という言葉が使用された。この考えは1963年の母子健康に関するアメリカ公法を経て、以後の大統領に引き継がれ、アメリカ公法によって初めて世に出た。そしてこのアメリカ公法の中で「精神遅滞」が「発達障害」に、「臨床訓練」が「相互育成的訓練」に変わり、ここで初めて発達障害という言葉が公的に認知されることになった。そこでは発達障害は、「精神遅滞 mental retardation, 脳性麻痺 cerebral palsy, てんかん epilepsy, または精神遅滞と同様の状態にある個々人によって要求される治療・処置と同じ治療・処置を必要とし、保健・教育・福祉 (HEW) 長官によって認定された神経学的症状に限定した障害 disability を意味しており、その障害は18歳までに生じ、現在から将来にわたって本質的なハンディキャップを構成するものである」と定義されたとされる。

「発達障害の基礎」(1999) では以上のような歴史があった上で、発達障害という概念は原因論に基づいて作られたものではなく、子どもの頃に受けた障害が現在も継続して存在する子どもや成人の全てを含んでいたと説明している。そして、ここでは一時的な障害、リハビリテーションによって克服しうような障害、18歳以後に生じた障害、はっきりしない無力な障害などは含まれず、この用語は診断のためのものではなく、サービスを受ける適正を明確にするために用いられるものであった。

また、「発達障害の基礎」(1999) では日本における発達障害の概念も1970年のアメリカの公法に影響を受けたとし、以下のようにその歴史を説明している。それによると、1972年、発達障害という言葉を取り上げた愛知県の心身障害者コロニーの初代総長であった村上氏廣は、遺伝的、周産期、その後の環境の影響などによって脳障害を受けた精神遅滞や脳性麻痺などの心身障害を発達障害と述べたという。つまり発達障害を疾患や事故の後遺症、老化とは区別し、発生障害 (発育障害) と区別する概念と意識していたのである。

一方、同じ頃に医学領域でも特殊教育の領域に発達障害という概念が取り入れられた。そして研究の分野では1979年、「発達障害研究」(現日本発達障害学会機関誌) が刊行され、発達障害がはっきりと日本の歴史に入った。この頃の日本における発達障害の定義について松野 (1985) は「精神遅滞と同意語として用いられたこともあるし、精神遅滞および脳性麻痺、てんかん、自閉症ならびにその他の神経学的異常が原因で精神遅滞類似の障害をさす包括的な用語として用いられることもある。さらにもっと広く感覚障害、言語障害などの発達期に起こるいろいろの障害をさすこともある」と述べている。発達障害は多様な形態で現れる障害を総合的な体系でまとめる上で必要であるという考え方であった。

B. 発達障害の概念

「発達障害の基礎」(1999) では、発達障害という言葉は一般的内容も含んでいたが、何が能力障害であるかを考える上で必要な言葉でもあったとし、それは正常の機構、能力、機能の発達に対する用語として捉えられ、発達遅滞、発達障害、発達能力障害などと表現されたと説明されている。そこで、疑われる機構に損傷はないが発達の期待に答えていない機能は「遅滞 delay」であり、機構の損傷に見合った機能の障害であれば「疾病 disorder」とされた。そして同時に遅滞であれ損傷であれ、それが人生を

通して続くならばそれは発達性の能力障害 disability と考えねばならず、発達障害はこのような概念として作られてきたと説明が加えられている。初めは疾病概念としてスタートをしたが、次第に発達障害は医学モデルから外れ、社会と個人の関係という障害モデルへと進むこととなったのである。

C. ICD-10 (国際疾病分類第10版)の発達障害の定義

ICD-10 (2006) における発達障害は、心理的発達の障害として、「会話および言語の特異的発達障害」「学力[学習能力]の特異的発達障害」「運動機能の特異的発達障害」「混合性特異的発達障害」「広汎性発達障害」「他の心理的発達障害」「特定不能の心理的発達障害」とされている。そしてそれとは別に小児期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害として「多動性障害」「チック障害」が設定されている。

D. 発達障害者支援法における発達障害

2004年12月に成立し、2005年4月に施行された発達障害者に対する支援を定めた法律である発達障害者支援法の中で第二条の定義文では発達障害は、「この法律において「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう」と定義されている。

E. 本論文における「発達障害」の定義

本論文では偉人たちに発達障害傾向があるかどうかの鑑別をする際に用いる定義として、DSM-5 (2014) の「神経発達症群/神経発達障害群」の中から、「知的能力障害群」、「コミュニケーション症群/コミュニケーション障害群」、「運動障群/運動障害群」「他の神経発達症群/他の神経発達障害群」を除いた「自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害」、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」、「限

局性学習症/極限性学習障害」を「発達障害」とする。また、本論文では発達障害傾向を調べることを目的とするため、「自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害」と「反応性アタッチメント障害/反応性愛着障害」、「注意欠如・多動症/注意欠如・多動性障害」と「脱抑制型対人交流障害」とを鑑別する。

3. サヴァン症候群について

Treffert (1990) によれば、サヴァン症候群は極めてまれな症状であり、「その障害とはあまりにも対照的に、驚異的な能力・偉才の孤島を有する」ものであるという。そしてその能力が現われる分野は限られており、計算や美術、暗記などの分野に現われる。また、現われ方にも、先天的なものや後天的なものなど幅がある。

本研究で取り上げる偉人たちはそれぞれの科目・分野で様々な業績を挙げ、後世に名を残した人物たちである。そういった偉人たちはそれぞれの分野に傑出した才能を持っていたのだと言えるだろう。こうした一般的に天才と言われているような人物の逸話として、幼い頃からずば抜けた能力を見せていたなどという話を耳にする。それは時に秀才や頭脳明晰、天才という言葉で納めて良いのだろうかという能力であったりするのではないだろうか。偉人たちがサヴァンの出現しやすい低い知能指数であったり、重度の知的障害や自閉症だった可能性は低い。しかし、美術や音楽・数学の科目での傑出した才能は、サヴァン症候群の人が持つサヴァンスキルに近いものであった可能性は無いのだろうか。天才と言われていても、何にも精通するような万能人であったということはないであろうと考えられる。そういった場合、その特定の分野に傑出した能力部分と言うのは何なのかを考えるために、サヴァン症候群・サヴァンスキルという概念についてを考えたいと思う。知的発達の遅れや重度のコミュニケーション能力の障害などがあるにも関わらず、その知的能力からは考えられないほどの優れた特異な能力を発揮することを「サヴァン症候群 savant

syndrome」という。Treffert (1989) によれば、サヴァン症候群は一般的に「全般的な知的障害を示す一方で、記憶、数学、芸術などの特定の領域で並はずれた能力・スキルを示す人」と定義される。サヴァン症候群の人は自閉症児者に多く、自閉症児者の10人に1人の割合で生じるとされる (Pring, 2005)。さらに脳損傷患者または知的障害者の2,000人に1人の割合で見られ、サヴァンと判明した患者のうち少なくとも半数が自閉症、残りの半分にも他の発達障害が見られる (Treffert & Wallace, 2002)。

A. サヴァンスキルの区分

Treffert (1990) は、サヴァンの技能を「天分のあるサヴァン」と「奇才のサヴァン」に分類した。「天分のあるサヴァン」とはその人の持っているサヴァンの技能が「当人の障害にひきくらべればすばらしい程度」のものであり、正常な人が持っていても見事とまではいえないようなものを言う。「奇才のサヴァン」とはその能力や偉才が「障害と比較して驚異的というだけではなく、通常の人間にそなわっていたとしても驚異的」なものを言い、この例はめったに見られないとした。

また、TreffertとWallace (2002) は、サヴァンスキルを①世界的にその分野において高く評価される能力を発揮している人を意味し、世界的に見ても傑出したスキルを有する“prodigious savant”，②その人の全般的な能力の中で音楽や美術、計算などある特定の領域で突出したスキルがあることを意味する“talented skill”，③特定の出来事（音楽やスポーツなど）について特異的記憶を有する“splinter skill”の三つに分けた。

B. 本論文におけるサヴァンの扱いについて

1877年にジョン・ラングドン・ダウンが「白痴のサヴァン idiot savant」として定義した時には知能指数25以下とされていたサヴァン症候群も、(Treffert & Wallace, 2002) によれば、現在では知能指数40～70の人に見られること

が明らかにされている。しかし例外的に知能指数114という人もいる。研究方法で挙げるが、本研究で対象となる人物を選ぶ際に使用した条件では、必ずしも社会的なコミュニケーションが必要であるとは言い切れないが、そういったものが必要とされるようなものが多いと思われる。そのため、前述したが、研究で使用した人物がサヴァン症候群が多いとされる重度の自閉症であったり、知的発達の遅れや重度のコミュニケーション障害をもっているようなサヴァン症候群であったことは考えづらい。

しかし、重度の障害を持っていないとも「天才」という語だけでは説明がつかないような Treffert & Wallace (2002) が主張した“prodigious savant”や“talented skill”のようなものを持っていた人物はいないのだろうか。また、アイランドの「特定の能力にかたよる傾向は、正常な知能の人あるいは天才の場合でも見られ、ときには全体的な能力の調和をくずすことさえある」という意見のようにサヴァン症候群と言えないまでもバランスを崩すような異様な能力の偏りを見せる人物はいないのだろうか。

本研究では、「頭脳明晰」や「天才」では説明できないような、あくまでもサヴァンスキルの傾向と見られるようなものがあつた場合にサヴァンスキル的な能力の傾向と判別をしたいと思う。

4. パトグラフィーにおける発達障害研究

精神分析的な内容や精神病を扱ったパトグラフィー研究が多い中で発達障害はパトグラフィー研究としてどのように研究されてきたのであろうか。

天才と発達障害を扱ったものとして、岡南 (2011) の『天才と発達障害 映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル』という本がある。この本の中では視覚優位で映像思考のガウディをノートのスペル違いの多さや書字のあいまいさ・言語表現の少なさなどから軽度のディスレクシア (読み書き障害)、他者の気持ちに疎いエピソードからアスペルガー症候群的

傾向であったのではと考察し、ルイス・キャロルは聴覚優位であり、言語感覚に優れていたが吃音障害があったこと、数字をはじめとしたいくつものこだわり・収集癖があったこと、歩き方の異様さ、癲癇持ちということからアスペルガー症候群的要素があったことを考察している。

また、正高信男（2009）の『天才脳は「発達障害」から生まれる』では織田信長・葛飾北斎・南方熊楠・野口英世・中内功の5人の人物を、それぞれの抱えていた困難から脳の機能に障害があったのではないかという視点でパトグラフィー研究を行っている。同じく正高（2004）の『天才はなぜ生まれるか』という本では、トーマス・エジソン、アルベルト・アインシュタイン、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ハンス・クリスティアン・アンデルセン、アレクサンダー・グラハム・ベル、ウォルト・ディズニーの個性と独創性に注目してパトグラフィーを行い、障害と創造性についてを考察している。

これらの発達障害と天才や偉人を結びつけた研究で共通して主張されている事は、障害のマイナス面を捉えるのではなく「障害があったからこそ」の功績があったということ、そして障害があったからこそ個性や発想というものが、「障害の強み（strength）」があるということ、現代の一般的な学校での教育は発達障害を持つ子どもにとってその才能が生かしきれずに学習しづらい現状があるということである。

5. 問題と目的

以上見てきたように、特定の分野で業績や功績を残した人物、天才として名が知られているような人物を対象とした今までのパトグラフィー研究は、その人物の個性としての病理や創造性、病理性と才能の研究などが検討されたものであった。そしてそれらの多くは精神病圏の研究が多い。しかしそのような研究では、何を持ってどこからを天才とするのかなどの「天才」という定義もあいまいであり、また、対象となる人物を複数の分野から定義づけを行って選考したり発達障害という一つの視点から多人

数を見たものは見当たらない。

発達障害は今、その増加が叫ばれていたり障害のスペクトラムや多様化など注目される問題である。そのことは発達障害に関する先行研究が、臨床研究としての薬物治療の報告から、発達障害のある子どもに関わる教師や親たちの問題の研究、特別支援教育の在り方についての研究、発達障害の当事者研究に至るまで多岐にわたり数え切れないほどたくさんの研究がなされていることから考えられる。

しかしこれだけ発達障害が注目される問題となり身近になったにも関わらず、注目されるのはそのマイナス面の方が大きいように感じられる。多くの先進国ではその子どもの能力や発達のでこぼこに合わせた特別な教育プログラムが存在する。例えば一例としてアメリカでは「2E（twice-exceptional）教育」というものがある。日本の教育はでこぼこの「ぼこ」の部分にばかり注目し、そこを補うことに力を注ぎ、「でこ」の部分への注目は外国に比べ少ないと考えられる。このことは障害のマイナス面にばかりとらわれ、その子どもの持っている個性や才能などを潰している可能性へとつながる。

しかし日本でも近年、「突出した能力」への注目がなされてきているような動きが出てきた。その一例として東京大学先端科学技術研究センターと日本財団が共同プロジェクトとして2014年に始めた異才発掘プロジェクト（Room Of Children with Kokorozashi and Extraordinary talents：ROCKET）が注目される。

以上のようなことを考えていくと、何かしらの分野で突出した才能を見せた過去の偉人たちの中には、発達障害傾向を持ちながらある分野で突出した部分を持っていた人物はいなかったのだろうかという疑問が浮かぶ。

そこで本研究では、条件を設けて定義づけを行い、複数の科目の分野から歴史的業績を残したといえるような研究の対象となる人物をリストアップし、その人物たちの発達障害傾向について検討したい。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象となる人物の選定

まず対象となる歴史的業績を残した人物の選定には、高校の各科目の10科目の教科書（数学・化学・科学・物理・生物・地学・倫理・国語・美術・音楽）を使用し、そこから、①印刷技術のできた1445年から明治以前である1868年までの間（文字情報を集められる限りの歴史に属すると考えられる期間）に功績・業績を上げている事、②重要な定理・法則などを発見または残している人物であること、代表的な作品のある人物であること、文化的貢献をした人物であること、③各科目の教科書の～史という年表に名前が載っていること、④日本語で読める状態のものとして自伝・または伝記・伝文があり、生育暦の調べられる人物であること、という4つの条件に当てはまる人物を対象とする人物とした。また、その際に対象となる人物は年代をまたいでいても1868年に20歳以上であれば対象の人物とした。また、本研究では分野ごとの偏りがあるのかなどを見るために複数の科目から人物をリストアップするが、「出来事ではなく業績を見る」ということで日本史・世界史・政治経済は外した。

2. 鑑別診断

選定をした人物たちの可能な限りの文字情報（伝記・自伝・伝文）を集め、成育歴をまとめた資料を作り、その資料を基にゼミの時間中に担当教員及び博士課程後期の大学院生を含む2名以上の人物によってDSM-5の診断基準に基づいて鑑別診断を行い、発達障害の可能性の抽出を試みた。

その後、さらに発達障害だったのではないかと鑑別をした人物たちについてその共通点を探る作業を行った。

Ⅲ. 仮説

歴史的に業績を残した人物の中には発達障害の人物がいるのではないかと。そして、発達障害傾向による突出した部分が業績につながる可能性を考慮すると、数学・化学・科学・物理・生物・地学・倫理・国語・美術・音楽の10科目の中でも、①自閉症スペクトラムの人物には数字にこだわる人物が多いといったことから数学・化学・科学・物理には発達障害傾向の人物がいるのではないかと、②サヴァンスキルでは美術や音楽の才能現れやすいことを考えると、突出した才能として美術や音楽の才能を持っていた人物は発達障害傾向を持っているのではないかと、③言語的な能力が主となる国語と倫理には発達障害の人物はいないのではないかと、という3つが考えられる。

Ⅳ. 結果

1. 量的視点から見た結果

今回の研究の結果では、科目ごとで発達障害があると鑑別をできた人物の割合は、数学10%、化学16.7%、科学14.3%、物理0%、生物0%、地学14.3%、倫理0%、国語0%、美術20%、音楽0%であった。詳細は以下で示す。

また、全科目の人物の中で発達障害と鑑別をした人物の割合は、89人中6人で6.7%という結果となった。障害ごとの割合としては、今回発達障害とした「自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害」、「注意欠如・多動症／注意欠如・多動性障害」、「限局性学習症／極限性学習障害」の3つそれぞれで、全体の中で自閉スペクトラム症が33.3%、注意欠如・多動症が50%、限局性学習症が16.7%であった。

さらに発達障害と鑑別をした6人のうち、外国人が5人、日本人が1人と、伝記や自伝を残すかどうかという文化の違いもあると考えられるが、外国人の方が多いという結果になった。今回の研究では鑑別を「健常」「発達障害」「発

達障害以外の何かしらの障害・病気」「鑑別不能」「鑑別はつかないが何かしら健常とは言い難い例外」の5つに分けたが、それぞれの割合は、健常が89人中31人で34.8%、発達障害が89人中6人で6.7%、発達障害以外の何かしらの障害・病気が89人中21人で23.6%、鑑別不能が89人中28人で31.5%、例外が89人中3人で3.4%という結果であった。

2. 発達障害の人物の分布

今回の研究で対象となった人物は、数学10人、化学6人、科学7人、物理3人、生物2人、地学7人、倫理27人、国語8人、美術10人、音楽9人の計89人であった。

そのうち発達障害があると鑑別のできた人物は、数学1人、化学1人、科学1人、物理0人、生物0人、地学1人、倫理0人、国語0人、美術

2人、音楽0人の計6人であった。また、生涯や業績は分かるものの、幼少期の記述や人となり分かるような記述が資料に十分に無い人物は鑑別が不能ということで除外とし、その人数は、数学6人、化学0人、科学0人、物理1人、生物1人、地学0人、倫理10人、国語6人、美術1人、音楽3人の計28人であった。

これらの人物の分布の仕方は、数学や化学・科学・物理といった理数系科目と美術や音楽に発達障害があり、国語や倫理といった言語的な能力が主となるような科目にはいないのではないだろうかという仮説にはほぼ当てはまる形になったと言えるだろう。

3. 状態・鑑別の詳細

各科目における鑑別の結果は以下の通りである。

表1 数学

名前	鑑別
Cardano, G. (1501~1576)	記述が少なく鑑別不能
Fermat, P. (1601~1665)	記述が少なく鑑別不能
関孝和(1642?~1708)	記述が少なく鑑別不能
Euler, L. (1707~1813)	記述が少なく鑑別不能
Fourier, J. (1768~1830)	記述が少なく鑑別不能
Gauss, C. (1777~1855)	健常
Babbage, C. (1791~1871)	記述が少なく鑑別不能
Abel, N. (1802~1829)	自閉スペクトラム症疑い
Hamilton, W. R. (1805~1865)	うつ病傾向、アルコール依存症
Riemann, B. (1826~1866)	健常

表2 化学

名前	鑑別
Boyle, R. (1627~1691)	神経症・心身症傾向
Lavoisier, A. (1743~1794)	健常
Volt, A. (1745~1827)	注意欠如・多動症
Pasteur, L. (1822~1895)	一時的な適応障害
Nobel, A. (1833~1896)	うつ病傾向
Rutherford, E. (1871~1937)	健常

表3 科学

名前	鑑別
Gutenberg, J. (1400?~1468)	健常
Leibniz, G. (1646~1716)	健常
Franklin, B (1706~1790)	健常
Lamarck, J-B (1744~1829)	一時的な神経症的傾向
Faraday, M. (1791~1867)	健常
Mendel, G. (1822~1884)	神経症・心身症的
Edison, T. (1847~1931)	注意欠如・多動症

表4 物理

名前	鑑別
Hooke, R. (1635~1703)	記述が少なく鑑別不能
Watt, J. (1736~1819)	鑑別はできないがサヴァンのスキルの可能性あり
Foucault, J. (1819~1868)	適応不全

表5 生物

名前	鑑別
Harvey, W. (1578~1657)	記述が少なく鑑別不能
Leeuwenhoek, A. (1632~1723)	精神病または強迫性障害

表6 地学

名前	鑑別
Copernicus, N. (1473~1543)	健常
Galilei, G. (1564~1642)	健常
Kepler, J. (1571~1630)	うつ病傾向
Steno, N. (1638~1686)	健常
Newton, I. (1642~1727)	反応性愛着障害
Smith, W. (1769~1839)	健常
Darwin, C. (1809~1882)	限局性学習障害

表7 倫理

名前	鑑別
Erasmus, D. (1469~1536)	健常
Luther, M. (1483~1546)	強迫神経症
千利休 (1522~1591)	記述が少なく鑑別不能
Montaigne, M. (1533~1592)	健常
藤原惺窩 (1561~1619)	記述が少なく鑑別不能
林羅山 (1583~1657)	健常
Descartes, R. (1596~1650)	反応性愛着障害傾向
中江藤樹 (1608~1648)	健常
熊沢蕃山 (1619~1691)	記述が少なく鑑別不能
山鹿素行 (1622~1685)	記述が少なく鑑別不能
Pascal, B. (1623~1662)	健常
伊藤仁斎 (1627~1705)	記述が少なく鑑別不能
松尾芭蕉 (1644~1694)	記述が少なく鑑別不能
Leibniz, G. (1646~1716)	記述が少なく鑑別不能
石田梅岩 (1685~1744)	うつ病傾向
賀茂真淵 (1697~1769)	記述が少なく鑑別不能
Rousseau, J.-J. (1712~1778)	鑑別はできないが倒錯の様子が見られる
Kant, I. (1724~1804)	健常
本居宣長 (1730~1801)	健常
杉田玄白 (1733~1817)	健常
Hegel, G. (1770~1831)	記述が少なく鑑別不能
平田篤胤 (1776~1843)	記述が少なく鑑別不能
二宮尊徳 (1787) 1856)	PTSD傾向
佐久間象山 (1811~1864)	健常
Marx, K. (1818~1883)	愛着性障害
吉田松陰 (1830~1859)	強迫神経症
福沢諭吉 (1835~1901)	鑑別はできないが現実検討の低さが見られる

表8 国語

名前	鑑別
契沖 (1640~1701)	記述が少なく鑑別不能
井原西鶴 (1642~1693)	記述が少なく鑑別不能
向井去来 (1651~1704)	記述が少なく鑑別不能
近松門左衛門 (1653~1725)	記述が少なく鑑別不能
与謝蕪村 (1716~1784)	記述が少なく鑑別不能
小林一茶 (1763~1828)	反応性愛着障害による行動障害
十返舎一九 (1765~1831)	記述が少なく鑑別不能
柳亭種彦 (1783~1842)	健常

表9 美術

名前	鑑別
Leonardo da Vinci (1452~1519)	自閉スペクトラム症
Michelangelo, B (1475~1567)	健常
長谷川等伯 (1539~1610)	記述が少なく鑑別不能
狩野永徳 (1543~1590)	過剰適応
伊藤若冲 (1716~1800)	健常
池大雅 (1723~1776)	健常
葛飾北斎 (1760~1849)	注意欠如・多動症
Constable, J. (1776~1837)	健常
渡辺崋山 (1793~1841)	ストレス障害の疑い
Morris, W. (1834~1896)	健常

表10 音楽

名前	鑑別
Bach, J. (1685~1750)	健常
Haydn, J. (1732~1809)	健常
Mozart, W. (1756~1791)	神経症
Beethoven, L. (1770~1827)	統合失調型パーソナリティ障害
Schubert, F. (1797~1828)	健常
Mendelssohn, F. (1809~1847)	記述が少なく鑑別不能
Chopin, F. (1810~1849)	記述が少なく鑑別不能
Smetana, F. (1824~1884)	健常
Dvořák, A. (1841~1904)	記述が少なく鑑別不能

4. 発達障害だと鑑別をした人物のDSM-5鑑別内訳について

本研究で発達障害だと鑑別をした人物の、鑑別理由に繋がるような部分だと思われる自伝や伝記内での主な記述部分とそれに対応すると思われるDSM-5内での鑑別に用いた定義を以下に示す。

A. ニールス・ヘンリック・アーベル (数学)の鑑別

ニールス・ヘンリック・アーベルの鑑別は自

閉スペクトラム症とした。アーベルに関する資料の記述の中から主に以下の5点に注目をし、それぞれの事柄に対

して鑑別を以下のように行った。

- ①あまりの数学に対する偏愛で、他の科目の宿題をなおざりにすることもあった：自閉スペクトラム症B- (3)
- ②句読点の使い方は下手であり、人に「まったく句読点を使わない」と冗談で言われるほどであった：限局性学習障害A- (4)
- ③あまりにも多くのアイデアを持っていた

ので、大学の教授たちの講義についてすべての注意を常に注いでいることはできなかった：自閉スペクトラム症A—(1)

- ④それにもかかわらず数学の試験では素晴らしい成績を取った：自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑤昼夜逆転をして夜に何時間も極度に働いたり疲労の中で苦しい仕事を続けたり日中早くにベッドに横になったりしていた：自閉スペクトラム症B—(4)

B. アレッサンドロ・ボルタ (化学) の鑑別

アレッサンドロ・ボルタの鑑別は注意欠如・多動症とした。ボルタに関する資料の記述の中から主に以下の4点に注目をし、それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①4歳まで言葉がしゃべれなかった：限局性学習障害A—(1)
- ②7歳の頃に泉で砂金探しをしていて溺れかける、自分の家で絹や羊毛・松やに硫黄など手当たり次第のものを使って実験をする、細長い棒を絶縁体にしようと思いフライパンで炒めるなど、両親に心配をかけることもあった：注意欠如・多動症A—(2)—(c)(d)(e)
- ③ガットーニの実験室で様々な実験をし、ヨーロッパの名高い電気物理学者たちに片っ端から手紙を書き、多くの科学者と友達になっていった：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ④ボルタはよく劇場に行つて人に会い、気分転換をした。そんな折、劇場でマリアンナという女性を見て恋に落ちる。一旦恋に落ちたボルタはマリアンナの声、顔、演技や歌に魅了されており、マリアンナの事を考えると実験も報告も家の用事も手につかず、しばらくは気体や電気の事も忘れてしまうほどの状態になった：注意欠如・多動症A—(1)—(a)(d)

C. トーマス・エジソン (科学) の鑑別

トーマス・エジソンの鑑別は、注意欠如・多動症とした。エジソンに関する資料の記述の中から主に以下の8点に注目をし、それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①小さい頃から放浪癖のあったエジソンはその折に探検と称して出かけてなかなか帰ってこず、家族を心配させたりしていた：注意欠如・多動症A—(2)—(d)(e)
- ②少年時代のエジソンは好奇心が強く、質問を次から次へと繰り返出し、どんなガラクタでも大切にしまい込む少年であった：注意欠如・多動症A—(2)—(f)
- ③幼いころから鋭い観察眼と優れた記憶力を持っており、そういったことを示すエピソードはたくさん残っている(例：寝室の窓から何時間も馬車の行列を観察する、木こりの歌を覚える、村中の商店の看板を精巧に模したなど)：自閉スペクトラム症B—(3)
- ④現象を究明しようとするあまりに、蜂の巣を調べようとして牧草地に入り雄羊に追いかけてまわされたり、スケート靴の紐を短くしようとして誤って中指の先端部分を切り落としたり、鳥が空を飛べるのはミミズを食べるからだと思い込み、ミミズをすりつぶした液体を近所の女の子に飲ませて鞭で叩かれたりといった失敗も多くやっていた：注意欠如・多動症A—(1)—(a), A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症A—(1)
- ⑤学校でのエジソンは注意力散漫で空想にふけるところがあり、いつも上の空で気が利かず、授業中に居眠りをしたり単純な課題をさぼってノートにいたずら書きをしたりしており、勉強向きの子どもではなかった：注意欠如・多動症A—(1)—(b)(c)(d)(f)
- ⑥少しでも時間があれば眠れる居眠りの達人であったエジソンは電信機の連絡を逃してしまい、「けん責」処分を受ける：注意欠如・多動症A—(1)—(a)(b)(d)

- ⑦生活が安定すると再び旅に出たくなる：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ⑧次から次へと勤務先を変えた：注意欠如・多動症A—(2)—(e)

D. チャールズ・ダーウィン（地学）の鑑別
チャールズ・ダーウィンの鑑別は限局性学習障害，自閉傾向の疑いとした。ダーウィンに関する資料の記述の中から主に以下の7点に注目をし，それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①幼かったころは長い時間一人歩きをするのが大好きだった：自閉スペクトラム症A—(3)
- ②物思いにふけることも好きだった：自閉スペクトラム症A—(3)
- ③学校に通う頃にはすっかり博物好き・収集好きになっており，イギリスの田舎を歩き回っては植物の名前表を作ろうとしたり貝殻や封筒のシール・貨幣・鉱物など何でも集めていた：自閉スペクトラム症B—(3)
- ④集めたものには色々な思いを巡らし，名前を調べて一つ一つにラベルを貼っていた：自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑤一生の間でどんな言語もマスターすることができず，学校で作詩法に特別な注意が払われていたがそれが苦手であり，時には友達に手伝ってもらって題目を作っていた：限局性学習障害A—(3)(4)
- ⑥前日の課題を暗記することは得意で，その他の課題のホメロスなどの詩の40・50行程度ならば朝の礼拝の間にたやすくできた。しかし，覚えた詩はどんな詩でも丸二日の間には忘れてしまった：限局性学習障害A—(2)，サヴァン・スキルの可能性
- ⑦いくつかのギリシア文字に至るまで前に覚えたことをほとんど全て忘れてしまっており，家庭教師について勉強をして通例の10月ではなく1828年の初めに入学：限局性学習障害A—(3)(4)

E. レオナルド・ダ・ヴィンチ（美術）の鑑別
レオナルド・ダ・ヴィンチの鑑別は自閉スペクトラム症とした。レオナルドに関する資料の記述の中から主に以下の11点に注目をし，それぞれの事柄に対して鑑別を以下のように行った。

- ①動物に強い親近感を持っていた：自閉スペクトラム症B—(3)
- ②子ども時代人を驚かすために箱に入れてトカゲを飼っていた。そしてこのトカゲに翼や角やひげなどを水銀でできた合金でくっつけていた：鑑別不能だが奇異な行動
- ③書く字は鏡像文字であり，右から左へと逆に鏡文字として書かれていた：限局性学習障害A—(3)
- ④絞首刑として処刑されたベルナルド・ディ・バンディーノ・バロンチェッリのつるされた死体をその場でスケッチし，着ていた服などについての細かい記載をしている：自閉スペクトラム症A—(1)
- ⑤「最後の晩餐」作成時には，日の出から黄昏の時間まで筆を持ったまま黙然と座っていたかと思えば，寝食を忘れて描き続けたり，また3・4日壁画に触れずにただ熟考・観察をしていたかと思えば人体相互の姿体を調べては合点して何時間も時を過ごした。時には1・2筆描き加えたかと思うとどこかに急ぎ足で立ち去ったりもしていた：鑑別不能だが奇異な行動
- ⑥「鏡に映っているように描きだすこと」が最も優れた表現方法であるとしていた：自閉スペクトラム症B—(2)
- ⑦解剖の際には蠟燭の火のもとで人間の目を解剖したり，死体と同じ部屋で平然と過ごしたりしていたという：自閉スペクトラム症A—(1)，B—(3)
- ⑧徒弟に使った衣服代・徒弟が盗んだ金額などを全てノートに記録していた：自閉スペクトラム症B—(2)
- ⑨メモ書きには買おうと思っている書物の名前の一覧やそれを丹念に集めたり，単語帳の様なものも書かれていたりした。手稿の

大半は自然観察のメモであり、科学上の実験、論証、断想の類、絵画・彫刻などに関する理論的・技術的論述である。身近なメモや日常生活に関する記録は甚だ稀であった：自閉スペクトラム症B—(2)(3)

- ⑩ノートは大量にあり、その手稿の中ではレオナルドは自身の内面（感情）についてや身内、女性のことはほとんど語っていない。しかし、気になったことや大事なこと、親の死んだ時刻などについて書く文の時は、同じ文面を2回書くという癖がある：自閉スペクトラム症A—(1)
- ⑪若い時期から水や風に対する興味が強く、絵で描いてみたり飛行機を考えてみたりとしていた。その水に対する関心の強さから水流の変化を克明に描いたスケッチを何枚も残している：自閉スペクトラム症B—(3)

F. 葛飾北斎（美術）の鑑別

葛飾北斎の鑑別は注意欠如・多動症とした。北斎に関する資料の記述の中から主に以下の10点に注目をし、それぞれの事柄に対して鑑別を以下の表のように行った。

- ①酒も煙草も茶も嗜まず、菓子の類は好きだが日々の食事に関心はなく、破れた衣服もいとわず、ただひたすらに絵を描く人物だった：自閉スペクトラム症B—(3)
- ②四方を駆け回り、暇があれば貸本の挿図を見て絵の勉強をしていた：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ③春朗期約15年間に残した作品は浮世絵版画約200点以上、挿絵本約50種類以上、絵暦など膨大な数がある：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ④50歳を過ぎたころからは種々の鳥を画題とする作品を多く手掛けているが、その大半は通常の絵師が好んだ華麗な鳥類ではなく、鷲や鷹などの猛禽類であった：鑑別不能だが奇異な行動
- ⑤自ら調合した漢方薬（柚子と極上の酒を煮

詰めて白湯で割ったもの）によって回復した。また、北斎は長寿の薬というものも調合している（龍眼肉、砂糖、焼酎を壺に入れて60日間置いたもの）：鑑別不能だが奇異な行動

- ⑥引く波と寄せる波の違い、波の表と裏側の相違などまで追求をした。また、色々な滝を描き、落下する水の表現にこだわった：自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑦常に作画への執念を燃やし続けた人生を送り、読本挿絵・絵手本・錦絵・肉筆画など様々な分野で役者・美人・風景・古典など様々な題材に目を向け、和・漢・洋の画法を広く学んで飽くなき探究心で自己の画風完成を追い求めた：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑧立ち止まることを知らず、一つの事に熱中し、あるレベルに達するとすぐに新たなジャンルに挑戦をする人物だった：注意欠如・多動症A—(2)—(e), 自閉スペクトラム症B—(3)
- ⑨生涯の中で引越しと改号を繰り返した。特に引越しの回数はおびただしく、90年の生涯のなかで93回も転居をした。そのうち新宅を構えたのは一度のみであり、あとは借家住まいだった：注意欠如・多動症A—(2)—(e)
- ⑩部屋の中は門人の描いた図によると、散らかし放題の室内に家財道具といえは炬燵や日蓮像を納めた蜜柑箱くらいという飾り気のない質素な暮らしだった：注意欠如・多動症A—(1)—(e)

5. 鑑別した障害と定義ごとの個数

DSM-5における診断基準と照らし合わせてみたところ、自閉スペクトラム症ではB—(3)、注意欠如・多動症ではA—(2)—(e)の多さが特に目立ち、限局性学習障害に関しては目立って特に高い項目はないという結果となった。

特に自閉スペクトラム症のB—(3)の項目

は、診断名自体を自閉スペクトラム症としていない人物にも見られ、これは天才や偉人と言われるような人物の中で発達障害であった人物たちの要因として共通する所と考えることもできるかもしれない。

一方で、DSM-5の診断基準の中には該当しないようなものであっても、明らかに奇異な行動や突出した能力の高さを見せる人物もいたことも注目に値するのではないだろうか。これらの能力はDSM-5上では診断する項目は無いが、その人物のエピソードとしては、その人物の個性的な面や特性を表していると考えられる。

V. 考 察

今回の研究では、歴史的に業績を残した人物の中にも発達障害の人物がいるのではないだろうかという仮説を立てたが、結果は89人中6人発達障害だと思われる人物がおり、仮説通りであったと言えるであろう。また、仮説では数学・化学・科学・物理の理系科目と美術・音楽に発達障害の人物がおり、国語と倫理にはいないのではないだろうかと想定した。この科目別の内訳に関しては、数学・化学・科学・美術に発達障害の人物が見られた他、物理と音楽には発達障害の人物はおらず、地学にも発達障害の人物が見られるという結果となった。この結果から、やはり発達障害の人物は理系と個性をそのまま突出させられるような美術に多く、言語的な能力が主となる倫理や国語といった科目には現れにくいのではないだろうかということが考えられる。

そして文部科学省が平成24年に実施した調査で通常の学級に6.5%の割合で発達障害の子どもがいるという結果が出ていたが、歴史的に業績を残すような偉人・天才の中にも発達障害の人物は一般の人達と同じようにいた。

また、その内訳を見てみると、DSM-5に記載されている発達障害のそれぞれの有病率を見ても、自閉スペクトラム症の有病率は

1%、注意欠如・多動症の有病率は2.5%、限局性学習障害の有病率は4%とされている。一方、本研究でのそれぞれの割合は、自閉スペクトラム症が2.2%、注意欠如・多動症が3.4%、限局性学習障害が1.1%であった。文系と理系の科目の発達障害人数の分布の違いを見ても、やはり言語的な能力が携わるものには発達障害はおらず、天才や偉人と言われるような功績を残した人物の中には、限局性学習障害を持った人物は一般よりも少ないと言えるであろう。しかしその一方で、自閉スペクトラム症と注意欠如・多動症は一般よりも多少多い割合と出た。

また、今回の研究での発達障害の6人の障害の割合は、自閉スペクトラム症2人、注意欠如・多動症3人、限局性学習障害1人と注意欠如・多動症が一番多かった。しかし発達障害と鑑別をした人物6人の発達障害らしいエピソードをDSM-5の定義に当てはめてみると、注意欠如・多動症の人物にも自閉スペクトラム症のB—(3)という項目が見られ、この項目は今回発達障害とした人物の中で一番多い項目であった。このことから天才には何かしらの異常なこだわりや執着が見られるという共通点があると考えられ、直接鑑別名になる程度までいってなくとも、自閉的要因を多かれ少なかれ持っているのではないかということが考えられる。また、注意欠如・多動症のA—(2)—(e)という項目も続いて多く、このことからDSM-5内の項目では診断されない、注意欠如・多動症の動きの多さによる生産性の面が伺える。この二つの項目が目立って多かったことから、自閉症的な異常なこだわり・執着の部分を持ち、それを何かしらの分野に向けて研究などを行い、注意欠如・多動症的な行動の多さを生産性へとつなげられた人物が偉人や天才と言われるような人物になる可能性が高いのではないだろうか。当たり前と言えば当たり前のことであると思われるかもしれないが、他の人物から一歩抜きん出た領域にまでいき、そこで業績を残せるほどにまでいけるというのも発達障害ならではのこだわりや生産性といった特性が

あったからだと考えられることもできるのではないだろうか。

しかし、その一方でDSM-5の診断基準に当てはまらないが明らかに奇異な行動・特出した能力を見せる人物もいた。アーベルの数学の能力やダーウィンの異常な記憶力の良さ、他にも発達障害ではなかった人物でも小さい頃からの異常な秀才ぶりなどがそれにあたると考えられる。これらはDSM-5の定義にはない「能力の高さ」という状態像があるということになる。発達障害を持つ人物の中で時として異様に高い記憶力や大人顔負けの専門知識を持っていたり、何かしらの突出した部分を持つ者が見られることは、先に述べた東大のROCKETプロジェクトなどで知られる所となっている。しかし、DSM-5上では障害を鑑別する項目はあっても、こうした能力の高さを説明・診断する項目は存在しない。この突出した能力の部分こそ、サヴァンのスキルの傾向なのではないだろうか。また、天才と言われるような人物に自閉的な傾向が多かれ少なかれ要素としてあったとすると、サヴァン症候群という診断がつくまでの状態で無くとも、自閉的な傾向のある人物にサヴァンスキル的な能力が出現するのではないだろうかということも考えられる。サヴァン症候群やサヴァンの能力のカテゴリーはDSM-5には存在しない。しかし発達障害でありながら明らかに能力のでこぼこの「でこ」の部分の能力を示す人物は存在する。それにも関わらず、DSM-5上では能力のでこぼこの「ぼこ」の部分に注目をされ、それにだけ名前がつくのである。障害名がつくことで薄れがちになるこの能力の高さは本来その人物の個性であり、そこをどう扱うか・どう活かすかによってそれは障害のプラスの面にもつながり得ることは、今回の研究で見たような「ちょっと変わった人」であった人物たちの業績が示すのではないだろうか。こうした能力の突出した部分を正式に命名しようとする、恐らくどの程度まで突出していればいいのかなどという問題になってしまうと考えられる。そのため、能力の突出部分に名称を

付けることは必ずしも必要なことではないだろう。しかし、このようなDSM-5上の診断基準では測れない側面があり、そこに目を向けることも重要だと思われる。診断を付けるための項目で後ろに隠されてしまっているその能力自体が発達障害のプラスの側面となり得るのではないだろうか。発達障害の出現の仕方によって多様だとも言われる。しかし診断は項目に当てはめられて行われてしまう。そこで、全てを項目に当てはめてみるのではなく、その個人のマイナス面だけではないプラス面にも目を向け、その個人を見ていくことが、十人十色の能力を示す発達障害の新たな可能性となるのではないだろうか。

VI. おわりに

本研究では歴史上で功績・業績を残し、現代に偉人や天才として名前が知られるような人物の発達障害傾向についてを研究した。

近年、教育現場や家庭など様々な場所で発達障害が問題とされ、その増加も指摘されている。それらは発達障害であることのマイナス面に多くの目が向いているからであると考えられる。現在では型にはまったような集団の中で過ごすことが多く、その中で「変わっている」ということがマイナスに捉えられることの方が多いのではないだろうか。そこで、本研究では発達障害であることのその特性や個性などプラス面に注目をしたいと考え、発達障害ならではの特性を活かしてプラスの業績へとつなげた「変わった人」というのはいなかったのだろうかということ想定した。

そこで人物を選定していったわけであるが、資料の集め方が甘かったと考えられ、それにより十分に鑑別・検討をできなかった人物もいたことが悔やまれる。

そして今回発達障害の鑑別をするためにDSM-5を使用した、DSM-5では能力のでこぼこの内、いわゆる「ぼこ」の部分しか測る項目が存在せず、発達障害であっても高い能力

を有していたり突出した能力があるような場合でも、それを測る項目は存在しない。発達障害であっても突出した能力を持っている事を経験上知っていたとしても、それは診断名という裏に隠されてしまい、薄い存在となってしまう。それは、その能力のアンバランスさこそがその個人の個性であったとしても、それを表せないことになってしまうのではないだろうか。また、DSM-5では、一つのエピソードを鑑別の項目に当てはめる際に、かなり主観的な印象などで鑑別を振り分けているのではないかという問題が今回の研究で考えさせられた所でもあった。今回複数人で鑑別を行った際に、そういったことが顕著に現れており、一つのエピソードに対しても複数の鑑別がつくということがあった。さらに、DSM-5では注意欠如・多動症の動きまわることによる行動の生産性などについての項目もなく、鑑別する際にみている面の偏りが感じられた。このようなことから、すべてをDSM-5に当てはめて考えるということは、個人個人でかなり幅のある発達障害の個人・個性を隠してしまうことにつながる懸念される。もちろんDSM-5による診断名も必要であるだろう。しかし、ただ診断名にとらわれるのではなく、必要なことは発達障害を持っていてもその個人のDSM-5の項目で鑑別されるような面だけではなく、特性や個性的な面、

それによって現れる可能性のあるプラスの面に目を向けることなのではないだろうか。現在、東大のプロジェクトやメディアで発達障害の子どもの特集が組まれるなど、その個性や特性に注目をする動きも出てきている。発達障害の人物のマイナスの面をできるだけ少なくしたり抑えたりしようとするのではなく、プラスの面に気づき伸ばしてあげることが必要になってくるのではないだろうか。

また、今回の研究は発達障害を主として研究したものであったが、その結果に付与して出てきた「発達障害以外の何かしらの障害・病気」という結果の人物が89人中21人おり、23.6%がそうであったということも注目に値するのではないだろうか。これは一般の人たちと比べて高い有病率であるといえるのではないだろうか。発達障害の人物を含めると3人に1人だけが健常ということになる。つまり、発達障害の割合は天才と言われるような人達と一般の人々で変わらなくても、何らかの障害・病気である率は天才と言われるような人達の方が高いと考えられる。今回の研究では発達障害を主として扱う内容であったため、これについての詳しい考察はできないが、発達障害の病理性だけでなく、精神病などの病理性も天才と言われるようになる業績に何かしら関与している可能性も考えられる。

文献

- 阿部喜三男 (1986). 人物叢書71 松尾芭蕉. 吉川弘文館.
- Aczel, A. D. (2004). *Pendulum: Leon Foucault and the Triumph of Science*. 水谷 淳 (訳) (2005). フーコーの振り子 科学を勝利に導いた世紀の大実験. 早川書房.
- Adamczewski, J. (1974). *Nicolaus Copernicus and His Epok*. 小町真之・坂元 多 (訳) (1983). コペルニクス. 恒文社.
- 会田倉吉 (1974). 福沢諭吉. 吉川弘文館.
- 有馬正高 (1999). 発達障害の基礎. 日本文化科学社.
- Baldwin, N. (1995). *Edison Inventing the Century*. 椿 正晴 (訳) (1997). エジソン——20世紀を発明した男. 三田出版会.
- Bardoe, C (文)・Smith, Jos A. (絵) (2006). *Gregor Mendel: The Friar Who Grew Peas*. 片岡英子 (訳) (2013). グレゴール・メンデル～エンドウを育てた修道士. BL出版.
- Bell, E.T. (1986). *Men of mathematics*. 田中 勇・銀林 浩 (訳) (2003). 数学をつくった人びとⅢ. 早川書房.
- Birch, B. (1989). *Louis Pasteur*. 菊島伊久栄 (訳) (1992). 伝記 世界を変えた人々10 パストゥール 微生物の研究により、はじめて伝染病の原因をつきとめたフランスの科学者. 偕成社.
- Bjerknes, C.A. (1885). *Gauthier-Villars*. 辻 雄一

- (訳) (1991). わが数学者アーベル. 現代数学社.
- Bouveresse, R. (1994). Leibniz. 橋本由美子 (訳) (1996). ライプニッツ. 白水社.
- Brown, P. (1993). Ludwig Van Beethoven (World's Greatest Composers). 橋高弓枝 (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家④ ベートーベン. 偕成社.
- Cassirer, E. (1918). Kants Leben und Lehre. 門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文 (訳) (1986). カントの生涯と学説. みすず書房.
- Cardano, G. (1576). De vita propria. 清瀬 卓・澤井茂夫 (訳) (1995). カルダーノ自伝 ルネサンス万能人の生涯. 平凡社. *De vita propria*, 1576.
- Carson-Turner, B. (1995). Franz Schubert: the World's Greatest Composers. 橋高弓枝 (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家⑤ シューベルト. 偕成社.
- 崔 善愛 (2010). ショパン. 岩波ジュニア新書.
- Cutler, A. (2003). The seashell on the mountaintop. 鈴木豊雄 (訳) (2005). なぜ貝の化石が山頂に? 地球に歴史を与えた男ニコラウス・ステノ. 図書印刷.
- Darwin, C. (2000). Barlow, N (編). 八杉龍一・江上生子 (訳). ダーウィン自伝. 筑摩書房.
- Delange, Y. (1984). Lamarck, sa vie, son oeuvre. Actes Sud. ベカエール直美 (訳) (1989). ラマルク伝——忘れられた進化論の先駆者. 平凡社.
- 童門冬二 (1998). 小林一茶. 毎日新聞社.
- Edelson, E. (1999). Gregor Mendel: And the Roots of Genetics (Oxford Portraits in Science). 西田美緒子 (訳) (2008). オックスフォード 科学の肖像 メンデル. 大月書店.
- 遠藤徹他 (2013). 高校音楽 I Music View. 教育出版.
- Franklin, B. (1791). Benjamin Franklin's Autobiography. 松本慎一・西川正身 (訳) (1982). フランクリン自伝. 岩波書店.
- 藤原正彦 (2002). 天才の栄光と挫折 数学者列伝. 新潮社.
- 福田歓一 (2012). ルソー. 岩波書店.
- 富永裕久 (1999). フェルマーの最終定理. ナツメ社.
- 古川 薫・岡田嘉夫 (2006). 佐久間象山 誇り高きサムライ・テクノクラート 時代を動かした人々. 小峰書店.
- 古川 治 (1966). 中江藤樹. 明德出版社.
- Gray, C. (1994). Johann Sebastian Bach (World's Great Composers). 秋山いつき (訳) (1998). 伝記 世界の作曲家② バッハ. 偕成社.
- 芳賀幸四郎 (1963). 千利休. 吉川弘文館.
- Hamann, B. (1990). Nichts als Musik im Kopf: Das Leben des Wolfgang Amadeus. Mozart. 池田香代子 (訳) (1991). 伝記 モーツァルト——その奇跡の生涯. 偕成社.
- 浜野卓也 (1998). おもしろくてやくにたつ子どもの伝記15 福沢諭吉. ポプラ社.
- Harvey, W. (1628). Exercitatio anatomica De motu cordis et sanguinis in animalibus. 暉峻義等 (訳) (1961). 動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究. 岩波書店.
- Heilbron, J.L. (2003). Ernest Rutherford And the Explosion of Atoms. 梨本治男 (訳) (2009). オックスフォード 科学の肖像 アーネスト・ラザフォード・原子の宇宙の核心へ. 大月書店.
- ひのまどか (1996). ハイドン——使い捨て作品と芸術作品. リブリオ出版.
- ひのまどか (2004). スメタナー音楽はチェコ人の命!. リブリオ出版.
- ひのまどか (2006). ショパン——わが心のポーランド. リブリオ出版.
- ひのまどか (2009). メンデルスゾーン——美しくも厳しき人生. リブリオ出版.
- 久松潜一 (1963). 契沖. 吉川弘文館.
- 平木幸二郎他 (2007). 倫理. 東京書籍.
- Honolka, K. (1974). Antonín Dvořák. 岡本和子 (訳) (1994). ドヴォルザーク. 音楽の友社.
- 堀 勇雄 (1959). 山鹿素行. 吉川弘文館.
- 堀 勇雄 (1964). 林羅山. 吉川弘文館.
- Huxley, R. (2007). The great naturalists. 植松靖夫 (訳) (2009). 西洋博物学者列伝——アリストテレスからダーウィンまで. 悠書館.
- 兵藤申一・福岡 登・高木賢志郎 (2006). 高等学校 物理 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 市古夏生・藤江峰夫 (1989). 江戸人物読本 井原西鶴. ぺりかん社.
- 一坂太郎 (2015). 吉田松陰——久坂玄瑞が祭り上げた「英雄」. 朝日新書.
- 伊狩 章 (1965). 柳亭種彦. 吉川弘文館.
- 伊馬春部 (1952). 芭蕉. 偕成社.
- 異才発掘プロジェクトROCKET (2015). 異才発掘プロジェクトROCKET. <https://rocket.tokyo/news/> (2015年12月2日取得)

- 石田一良 (1960). 伊藤仁斎. 吉川弘文館.
- 伊藤俊太郎・村上陽一郎 (1989). 科学の名著 第Ⅱ期8 (18) ボイル. 朝日出版社.
- Jacobs, R. (1977). Mendelssohn. 作田 清 (訳) (2010). メンデルスゾーン. 作品社.
- 片桐一男 (1971). 杉田玄白. 吉川弘文館.
- Kaulbach, F. (1888). Immanuel Kants Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. 井上昌計 (訳) (1978). イマヌエル・カント. 理想社.
- 河竹繁俊 (1958). 近松門左衛門. 吉川弘文館.
- 木下長宏 (2013). ミケランジェロ. 中央公論新社.
- 小林計一郎 (1986). 小林一茶. 吉川弘文館.
- Koestler, A. (1959). The sleepwalkers: A History of Man's Changing Vision of the Universe. 小尾信彌・木村 博 (訳) (2008). ヨハネス・ケプラー 近代宇宙観の夜明け. 筑摩書房.
- 小町谷照彦他 (2006). 新編国語総合. 東京書籍.
- 近藤鋼三 (1984). ノーベル. ポプラ社.
- 神津朝夫 (2009). 茶の湯の歴史. 角川学芸出版.
- 杵掛良彦 (2014). 岩波現代全書032 エラスムス 人文主義の王者. 岩波書店.
- 黒田泰三 (2010). 長谷川等伯 生涯と作品. 東京美術.
- 桑田忠親・小和田哲男 (監修) (2011). 千利休. 宮帯出版
- Leslie, C.R. (1951). Memoirs of the life of John Constable: composed chiefly of his letters. Jonathan, M. (編). 斎藤泰三 (訳) (1989). コンスタブルの手紙——英国自然主義画家への追憶——. 彩流社.
- McLellan, D. (1974). Karl Marx: his life and thought. 杉原四郎 (訳) (1976). マルクス伝. ミネルヴァ書房.
- 正高信男 (2004). 天才はなぜ生まれるか. 筑摩書房.
- 正高信男 (2009). 天才脳は「発達障害」から生まれる. PHP 研究所.
- 松田時彦・山崎貞治他 (2006). 高等学校 地学 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 松永俊男 (1987). ダーウィンをめぐる人々. 朝日新聞社.
- 宮西正宜他 (2009). 高等学校 数学 A 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2009). 高等学校 数学 I 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2010). 高等学校 数学 B 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2010). 高等学校 数学 II 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2011). 高等学校 数学 C 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮西正宜他 (2011). 高等学校 数学 III 改訂版. 新興出版社啓林館.
- 宮崎道生 (1995). 熊沢蕃山——人物・事績・思想. 新人物往来社.
- 文部科学省 (2012). 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm (2015年12月2日取得)
- 村井康彦 (1990). 千利休追跡. 角川書店.
- 村田 全 (2008). 数学をきづいた人々. さ・え・ら書房.
- 永井一正他 (2009). 高校美術1. 日本文教出版.
- 永田生慈 (2005). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品. 東京美術.
- 中川鶴太郎 (1991). ラヴォアジエ 人と思想101. 清水書院.
- 中島秀人 (1996). ロバート・フック ニュートンに消された男. 朝日新聞社.
- 中野 雄 (2006). モーツァルト 天才の秘密. 文藝春秋.
- 中村禎里 (1977). 血液循環の発見. 岩波書店.
- 中田 力 (2002). 天才は冬に生まれる. 光文社.
- 長澤源夫 (1993). 二宮尊徳のすべて. 新人物往来社.
- 奈良本辰也 (1985). 佐久間象山 人と思想48. 清水書院.
- 奈良本辰也 (1993). 二宮尊徳. 岩波書店.
- 成澤勝嗣 (2012). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい狩野永徳と京狩野. 東京美術.
- Nicholl, C. (2004). Leonardo da Vinci: Flights of the Mind. 越川倫明・松浦弘明・阿部 毅・深田麻里亜・巖谷睦月・田代明甚 (訳) (2009) レオナルド・ダ・ヴィンチの生涯 飛翔する精神の軌跡. 白水社
- 日経サイエンス編集部 (2002). 別冊日経サイエンス SIENTIFIC AMERICAN 日本版 脳から見た心の世界. 日経サイエンス社.
- 野田 章 (1969). 子どもの伝記全集・25 ニュートン. ポプラ社
- Novelli, L. (2008). Volta e l'anima dei robot. 関口英子 (訳) (2009). ボルタ 未来をつくった電池の発明 (天才!? 科学者シリーズ6). 岩崎

- 書店。
- 野添絹子 (2010). 2E教育の理念を英語の授業に活かすための基礎的調査——英文記憶における有効なストラテジーの検討——. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊18号-1 181-192.
- 相賀徹夫 (1988). 日本大百科全書19. 小学館.
- 小川鼎三 (1973). 杉田玄白. 国土社.
- 岡 南 (2011). 天才と発達障害 映像思考のガウディと相貌失認のルイス・キャロル. 講談社.
- 大久保康明 (2007). モンテニユ 人と思想169. 清水書院.
- 小野二郎 (1973). ウィリアム・モリス. 中公新書.
- 大野 進 (1991). ノーベル. 講談社.
- 太田昌孝 (2006). こころの科学セレクション 発達障害. 日本評論社.
- 太田青丘 (1985). 藤原惺窩. 吉川弘文館.
- 大谷晃一 (1996). 与謝蕪村. 河出書房新社.
- 大内初夫・若木太一 (1986). 俳諧の奉行 向井去来. 新典社.
- Paul de Kruif. (1959). *Microbe Hunters*. 秋元寿恵夫 (訳) (1980). 微生物の狩人 (上). 岩波書店.
- Rodis-L, G. (1995). *Decarte: biographie*. 飯塚勝久 (訳) (1998). デカルト伝. 未来社.
- Russell, C.A. (2000). *Michael Faraday: Physics and Faith (Oxford Portraits in Science Series)*. 須田康子 (訳) (2007). マイケル・ファラデー——科学をすべての人に (オックスフォード科学の肖像). 大月書店.
- 三枝康高 (1962). 賀茂真淵. 吉川弘文館.
- 齋藤 孝 (2006). 齋藤孝の天才伝8 モーツァルト 人を幸せにする「無邪気力」. 大和書店.
- 桜井正信 (1982). 少年少女伝記読みもの 十返舎一九. さ・え・ら書房.
- 佐佐木杜太郎 (1978). 叢書・日本の思想家⑧ 山鹿素行. 明德出版社.
- 佐藤康宏 (2006). アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品. 東京美術.
- 佐藤昌介 (1986). 渡辺崋山. 吉川弘文館.
- 佐藤満彦 (2000). ガリレオの求職活動 ニュートンの家計簿. 中央公論新社
- 柴田 実 (1964). 石田梅岩. 吉川弘文館.
- 下村寅太郎 (1983). ライブニッツ. みすず書房.
- 下中直人 (2007). 世界大百科事典. 平凡社.
- 白木 茂 (1971). 児童伝記シリーズ41 ワット. 偕成社.
- 城塚 登 (1997). ヘーゲル. 講談社.
- Specht, R. (1966). René Descartes. 中島盛夫 (訳) (1983). デカルト. 理想社.
- Steele, F. (2007). Isaac Newton: The Scientist Who Changed Everything. 赤尾秀子 (訳) (2008). ビジュアル版伝記シリーズ アイザック・ニュートン. BL出版.
- Steele, F. (2008). Galileo, The Genius Who Faced the Inquisition. 赤尾秀子 (訳) (2008). ビジュアル版伝記シリーズ ガリレオ. BL出版.
- 菅沼貞三 (1977). 池大雅 人と芸術. 二玄社.
- 裾分一弘 (1983). レオナルド・ダ・ヴィンチ——手稿による自伝. 中央公論美術出版.
- 鈴木健一 (2012). 林羅山——書を読み未だ倦まず. ミネルヴァ書房.
- 鈴木喜代春・阿部誠一 (絵) (1995). 吉田松陰30年の生涯——わたしの人間発見. あすなろ書房.
- 高橋昌義 (2010). パスツール. 講談社.
- 田辺 保 (1999). パスカル伝. 講談社.
- 高野敏夫 (1988). 本居宣長. 河出書房新社.
- 田原嗣郎 (1963). 平田篤胤. 吉川弘文館.
- 竹内 均 (2002). 数学の天才列伝. ニュートンプレス.
- 田村三郎 (1989). フランス革命と数学者たち. 講談社.
- 田中康二 (2014). 本居宣長. 中央公論新社.
- 田中善信 (1996). 与謝蕪村. 吉川弘文館.
- 田中隆莊他 (2012). 高等学校 改訂 生物 I. 第一学習社.
- 坪村 宏・斎藤 烈・山本隆一他 (2005). 高等学校 化学 II. 新興出版社啓林館.
- 戸叶勝也 (1997). グーテンベルク 人と思想150. 清水書院.
- 徳善義和 (2012). マルティン・ルター——ことばに生きた改革者. 岩波書店.
- 融 道男・中根充文・小見山実・岡崎祐士・大久保善朗 (2006). ICD-10 精神および行動の障害——臨床記述と診断ガイドライン——. 医学書院.
- Treffert, D. 高橋建次 (訳) (1990). なぜかれらは天才的能力を示すのか——サヴァン症候群の驚異. 草思社.
- 上田誠也・竹内敬人・松岡正剛他 (2003). 理科基礎 自然のすがた・科学の見方. 東京書籍.
- Wheen, F. (2001). Karl Marx: A Life. 田口俊樹 (訳) (2002). カール・マルクスの生涯. 朝日新聞社.
- Winchester, S. (2001). The Map That Changed The World: William Smith and the Birth of Modern Geology. 野中邦子 (訳) (2004). 世界を変

えた地図 ウィリアム・スミスと地質学の誕生. 早川書房.
山田一枝 (1969). 子どもの伝記全集・24 ガリレオ. ポプラ社.
山内志朗 (2003). シリーズ・哲学のエッセンス

ライプニッツ なぜ私は世界にひとりしかいないのか. NHK出版.
吉永良正 (2011). 神が愛した天才数学者たち. 角川学芸出版.